



# 町民文芸

## 只見短歌会 令和五年六月詠草

老いし我にも青春はあり戦争のくやしき思ひ遠くなりたり  
馬場 八智

新緑に季節外れの夏日あり山のいただき残雪も見ゆ  
関谷登美子

金婚を過ぎて幾春迎へしやあの日と同じ花々の咲く  
目黒 富子

ハイハイの息子のうしろを追いかける次はどこへと行くのだらうか  
立花 奏音

母逝きて主なき椅子は寒どむと広く空きゐて言葉も減りぬ  
新国由紀子

孫や子らの戻りし後の家の中静かな居間にテレビの音響く  
渡部ヨリ子

手の届く範囲に物を置きて病む我の巡りのつね片付かず  
故 新国 洋子(遺作)

## 只見俳句会 六月定例会

馬鈴薯の花摘んで居る温女かな  
ブルーシート敷きつめ青梅落としけり  
一穂

一輪の苺の花や隠れおり  
初夏の風津軽のポスター閃きて  
修 一

眠られぬ蛙の合唱夜もすがら  
風薫る学生街の喫茶店  
信

五月来る暑さも日増し季の早さ  
下萌えに小枝横たう庭の隅  
都

家々につつじ咲く街通りけり  
薔薇の花金婚祝いに五十本  
真理子

一人旅ひがしもにしも夏燕  
留守番の蜂一匹と愛犬と  
紺 青

青蜥蜴家主のごとく家敷に居  
葉桜や古戦の跡の診療所  
恒 夫

田水張る土塊りに波がしら  
川風の畑帰りやほととぎす  
礼

